

# コロナ禍におけるコミュニケーションテスト

## OPIcの利用展開について

八木 智裕（一般社団法人 G l o b a l 8）

キーワード: グローバル人材, コミュニケーションテスト, スピーキング, 効果率, ACTFL, COIL, AI, VR, オンライン学習, リカレント教育, 小学校英語教員研修

### 1. はじめに

従来の学会ではブースに最新適用事例をフライヤー化して情報交換の場を求め参加して参りました。コロナ禍でオンデマンド動画での一方通行の情報提供を余儀なくされる中、ニューノーマルな時代に持続可能な法人の思い、サービスのあり方等基礎情報の提供に加え、実際の活用場面の紹介を通して、大会テーマである「外国語教育におけるユニバーサルデザイン」への「つながり」に貢献して参りたいと思ひ出展動画を編集しました。ニューノーマルな学会活動への参加方法に向け、何なりとフィードバック頂ければ有難いです。

### 2. 一般社団法人G l o b a l 8について

当法人は、グローバル人材育成を目的として設立されました。ICTの進歩はグローバル社会をダイナミックに「つなぐ」ことに貢献している反面、機会に恵まれなかったりスキルが伴わないと断絶を誘発する恐れもあり、「時間軸」と「空間軸」を見据えた適切かつ丁寧な「つながり」作りが求められると考えます。「つながる」手段としての「語学力・コミュニケーション能力」においてACTFL準拠のコミュニケーション力測定に基づきグローバル人材育成の場をつなぐ法人を志向しています。

### 3. コミュニケーションテスト OPIc 概要

#### 3.1 OPIc テストとは

コミュニケーションテスト OPIc とは、全米外国語教育協会（American Council on the Teaching of Foreign Languages:ACTFL）が開発した汎言語的に使える会話能力テスト OPI(Oral Proficiency Interview) をベースにした iBT(internet based test) 形式のテストで、コミュニケーションテストとして世界最大級の実績を有します。

ACTFL の長年の経験に基づき、受験者の学習・到達レベルを測るべく、以下の点においてユニークな工夫がされています。①出題内容は Background Survey を通じた個人に合わせた問題、②問題数や難易度は受験申請時に自ら選んだ 5 段階のレベルに応じてランダムに生成、③所要時間は動作環境確認・準備で凡そ 20 分、発話テストは個々人の発話量や問題数で異なるものの 30 分程度で、全体として 1 時間以内を目安としています。テスト問題がオープンクエスチョンの為、従来のマークシートに馴染んだ学生は最初違和感を感じるものの、幅広く能力を引き出すことを可能にしています、④コミュニケーション継続能力、文章校正力、状況に応じた表現力、質問意図の把握能力、文法・語彙・流暢さ・発音、この 5 つを考慮しながら、ACTFL Speaking Guidelines2012 基準に準拠し、受験者の会話能力を総合的に評価してフィードバックされます。

### 3.2 コロナ禍での機能強化への取組み

OPIc サービス開始以来、発話ファイルのプラットフォームとして AdobeFlash を使用していましたが、2020 年末のサポート停止を見据え 2020 年 8 月 1 日より HTML5 を使用したグローバルバージョンへの移行を行いました。その際、次のような大幅な機能強化を図りました。①環境チェック（ブラウザが IE 限定から、ほとんどの主流ブラウザ対応に加えネットワークパフォーマンスの事前チェックが可能）②デモ体験（英語のみですがイメージとしては全言語共通）③評価対象言語:2 言語→14 言語に拡大④評価対象:Advanced Mid-Superior レベルを追加（但し評価拡張領域は申込時に申告により F o r m 変更を行います）

ただ評価対象領域を拡げた反面、日本人学生の多くが能力向上に時間を要する Intermediate Mid レベルを 3 分割評価して、その学習効果を支援して参りましたが停止せざるを得ませんでした。

## 4. コミュニケーションテスト OPIc 適用事例

コロナ禍で学会等のリアルの交流は停滞を余儀なくされ新たな取組は限られましたが、AdobeFlash 仕様の OPIc を利活用されていた学校においては、その適用は妨げられること無く新たなステージに「つながる」活用が窺えました。その全てを限られた動画で紹介することは困難ですが、法人の目指す「グローバル人材育成の場をつなぐ」視点から紹介したいと思います。

### 4.1 UMAP-COIL Program Use of OPIc Test for an Intensive COIL Course での活用

文部科学省「平成 30 年度『大学の世界展開力強化事業』～COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～」のタイプ B:交流推進・プラットフォーム構築プログラムに採択された関西大学での適用事例を簡潔に紹介頂きます。

### 4.2 COIL+AI 学習モデルへの適用紹介

青山学院大学では、ゼミ活動に COIL 学習を取り入れ、COIL 相手学生との学びの内容を充実させるため英語学習に AI Smart Speaker を取り入れました。その効果評価に OPIc を利用した事例を紹介します。発表内容は科研研究課題(研究課題/領域番号:19K00798)の一環で実施されたものですが、最終的には AI/VR/ICT/Computer Test を利用した英語教育におけるガイドラインを作成するとありますので、外国語教育のユニバーサルデザインの雛形として注視したいと思います。

### 4.3 理工系（ICT 活用）学習モデルとしてコロナ禍に「つなぐ」

AI 等の ICT を活用した英会話学習を東京電機大学の理工系学生に適用した科研結果を紹介させて頂きます。英語コミュニケーションを苦手とする理工系学生にとって ICT を活用した学習モデルは、英語学習というより ICT の利用局面を英語を通じて学ぶ CLIL 的要素を内包し、定性的評価にもつながっているように思えます。このような学習モデルの検証は今年以降も更に理工系学生の興味に寄り添う形で発展されるようです。

### 4.4 沖縄県観光業従事者のオンライン英会話学習効果測定

名桜大学で実施された沖縄県観光業従事者向けオンライン英会話学習・効果測定モデルは、リカレント教育モデルとして注目しています。同モデルを磨き上げる形で小学校教員のオンラインによるスピーキング能力の開発に適用されていますが、2020 年度から全面実施された小学校英語教育改革を ALT 頼りとすることなく、生徒と接点のある小学校教員のリカレント教育モデルとして期待したいと思います。